

若者たちの新たな門出に合わせるかのように、本城橋袂の紅梅、薬医門脇の白梅が満開を迎える中、奨学会の東田副会長をはじめとするご来賓、保護者の皆様をお迎えして、このように盛大に卒業式を挙行できますこと、大変ありがたく、心より御礼申し上げます。

まずは80名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。2期生が全員揃って卒業を迎えることができた今日この日は、なんて素敵な日なのかと思います。

そして、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。

さて、卒業生の皆さん、3年間の中学生生活はいかがでしたか？

水戸一高と同じ60分授業や、学苑祭、クラスマッチ、自由討論などの行事。それに加え、水戸一高にもない国内・海外研修旅行や語学研修、駅伝大会など、密度の濃い、充実した日々だったのではないのでしょうか。

一方で、中学生生活、思うようにはいかなかった、輝きを放てなかった、そう感じている人もいるかもしれません。

ここで、今から40年前の1985年に、まさにこの体育館から水戸一高を巣立っていった2人の生徒の話をしていきます。一人は帰宅部、もう一人は硬式野球部の生徒です。

帰宅部のほうは、心優しく、目立たない生徒。残念ながら、受験した大学には、ことごとくご縁がなかった。

野球部のほうは、やんちゃで、勉強への意欲が全くわからず、大学に進学すらしなかった。

卒業式の時点では、振るわなかった2人。その後どうなったか。

帰宅部のほうは、浪人時代、周りの勉強に打ち込むレベルの高さに驚き、負けじと猛勉強して力を伸ばし、東大に合格。卒業後、地元発祥の企業に入社してIT部門などで頭角をあらわし、来月、社長に就任する。日立製作所の徳永俊昭さんです。

野球部のほうは、3年間フリーターをしたあと、一高の先輩が営む地元企業に何とか就職。30歳で東京のコンサルティング会社に転職したことを機に、一念発起して仕事に打ち込み、その後独立。

FCEという会社を率いて、東京証券取引所に上場する企業へと育て上げた。石川淳悦さんです。

石川さんいわく、「人生は長期戦。どこで種が芽吹き、花を咲かすか、分からない」。

皆さんは、これからの人生において、これからの社会において、必ず大輪の花を咲かせます。

いつ咲かせるか、「正解」は誰にもわかりませんが、大事なことは、その日に向けて、「備えよ、つねに」“Be prepared”。

至誠一貫、堅忍力行の校是を胸に、うまず、たゆまず、諦めず、そして驕らず、誠実にわが道を進んでいてくれることを願うとともに、「花咲くを待つ喜び」を、今日この場に集った全員で分かち合いながら、式辞を結びたいと思います。最後に改めて、卒業おめでとう。Thank you so much!